

松井圭介著：『観光戦略としての宗教—長崎の教会群と場所の商品化』 筑波大学出版会，2013年3月刊，179p.，2,800円（税別）

美しい教会建築の写真に「戦略」という大胆なタイトルが付されたカバーデザインとは対照的に、本書の内容は多様な資料・データの着実な分析の積み重ねによって構成されている。本書は、著者が2004年より開始した長崎におけるフィールドワークの成果がまとめられたものである。以下、各章の内容を評者なりに整理して紹介したい。

I章では、本書の分析の基礎となる聖地とツーリズムにかかわる様々な視点が紹介されている。まず、聖地を社会的・文化的な構築物としてみるものが提示され、つづいて巡礼とツーリズムの関連性と両者のニーズを両立させることが巡礼地の課題であることが指摘されている。また、現代における聖地創造の存在を指摘し、ツーリズムの直接的な影響を受ける現代における聖地管理の重要性を主張している。そのため、上述の課題を克服するために各聖地独自の戦略を模索する必要性が生じていることが説かれている。

II章では、長崎県のカトリック信仰の歴史と現況について教会側の資料を分析し、カトリック教会が観光対象となりうる意味について検討している。その結果、殉教と復活という歴史的背景に加えて、教会堂のもつ建築的な審美性や周辺環境との調和性などの要素が折り重なり、信徒以外の人々をも惹きつける魅力になっているとまとめら

れている。また、本章には本書を読み進めていくうえで前提となる地域の基礎的な情報が網羅されており、長崎の「キリシタン文化」を容易に概観することができた。

III章は、観光客を受容する自治体に焦点をあて、現代の観光動態が示されている。ここでは、観光客数や観光消費額といった定量的なデータを用いて、観光行政が激しい状況にあることが示されている。そして、修学旅行の長崎離れ対策など、この課題を克服するために長崎県が現在取り組んでいる事業が概括されている。さらに、平戸市において、キリシタン文化の歴史物語が観光商品化された過程が整理され、聖地が観光商品化される意味について言及している。

IV章では、まず近年の「世界遺産ブーム」を概括し、その背景が検討されている。次に、世界文化遺産登録の運動によって、長崎の教会群とキリシタンの文化が地域文化の保全と観光資源としての利活用との両面で焦点化されたプロセスを検証している。その結果、世界遺産登録運動の担い手の動きに着目し、「生きた教会」から、カクレキリシタンの「文化的伝統」へと価値づけの方向転換が生じたことを明らかにしている。このように、近年の世界遺産登録運動における、ローカルな「宗教的地域文化」に対してグローバルな文化遺産として新しい意味が付与されていく際に生じる問題が指摘されている。

V章では、長崎県新上五島町を取り上げ、これまで観光対象になりえなかった離島の教会群への訪問者に焦点があてられている。ここでは、まず新上五島町における観光の動向、およびキリシタン文化を活用した観光戦略が示されている。また、島内観光イベントの参加者、カトリック信徒、観光客について、それぞれどのような目的で教会群を訪問し、またそこで何を体験したかが分析され、カトリック信徒にとっての聖地が新しい意味

をもった巡礼地への再編されていく様態が示されている。

Ⅶ章では、教会群やキリシタンにかかわる聖地が巡礼地としてオーソライズされていく過程が検討されている。そこでは、「ながさき巡礼」を通じた巡礼創造の担い手として、これを単純な観光資源の創出ではない新しい文化創造と位置付ける長崎県、および「本物の」巡礼創造を期待する長崎大司教区の取り組みを対比させ、聖地が社会的に構築される背景を検討している。

以上の議論を総括して、Ⅶ章では、長崎の教会群とカトリック文化にかかわる場所の商品化とそこにみられる課題が整理され、「キリシタン」が観光資源化される意味について考察している。そして、ツーリズムの功罪という視点から、①直接的な物理的・精神的被害、②信徒にとっての負担増、③教会の肖像権等の侵害、④教会に対する理解への要望が生じることが見出されている。また、場所の「ヘリテージ化」と観光消費にかかわる課題として、①場所のテーマ化・カタログ化の進行、

②創出されたロカリティが住民アイデンティティの強化と分裂を生むこと、③ロカリティの安直な創造にかかわる危険性が指摘されている。

宗教施設は、これまで日本のみならず世界中で、主要な観光対象であり続けたことは言うまでもない。また、これらに関連するツーリズムのインパクト研究では、これまで数多くの問題点が指摘されている。本書が宗教施設を取り上げてツーリズムとの関連からあらためて議論する意義は、巡礼とツーリズムの両者が不可分の移動であること、および場所に対する様々な関与が可能な現状であることを指摘した点にあると評者は考える。この意味で、著者が聖地／宗教という視点を一方的な管理を示す「観光対策」ではなく、「観光戦略」と位置づけた意味がよく理解できる。最後に、本書は、長崎において現在生じているツーリズムと聖地のダイナミクスが読み取れる格好の書であることを付言しておきたい。流行りのフレーズではないが、まさに「今」読むべき1冊といえる。

(小島大輔)